2011 年 11 月 26 日
第 7 回日中戦争史研究会　於：名古屋校舎

参加者（五十音順、敬称略）：
石井弓（東京大学）　王敬翔（愛知大学）　王暁葵（愛知県立大学）　杉谷幸太（東京大学）
張鴻鵬（名城大学）　馬場毅（愛知大学）　野口武（愛知大学）　布施潤（愛知大学）
森久男（愛知大学）　楊韜（名古屋大学）

記録作成：野口武

報告１：王敬翔（愛知大学）
「『水滸伝』、『三国志』の和訳について「信」と「達」の間の問題点
－黄得時と楊逵の翻訳を中心に

【報告要旨】

【質疑応答】（司会：馬場毅）
馬場：今日は「信」と「達」の概念を用いて分類しながら、江戸時代からの日本の『三国志』と『水滸伝』の翻訳について分析したうえで、黄得時と楊逵の翻訳の意味について分析していただきました。結論部分で「対内」、「対外」への日本語発信といった問題が提起されました。日本軍の検閲や統制も受けた背景のもとで植民地言語である日本語翻訳でありながら、台湾人としておかれた複雑な立場であったことであろうと考えられる。その中での楊逵の対日抵抗の意味がどういったものであったのかということにもふれた内容でした。では、各位ご自由にご発言ください。

森：今回の発表では『三国演義』の翻訳のみか。楊逵の理解として、日本語で翻訳を発表しており中国語で発表していない。『楊逵全集』は何語をもとに表現しているものなのか。同時代の人物に呉濁流が存在する。彼も中国語ではなく日本語で発表し、また戦後に日本語で作品を発表していない。楊逵の場合はどうか。その評価はどういったものか。
王：『三国演義』である。『楊逵全集』は日本語である。二人とも戦後に中国語で発表している。評価は良いと言える。

森：戦前に日本語教育を受けた台湾人は、日本語の修得に差異がある。楊逵の場合はどうか。
また、日本語教育を受けた世代の台湾人は、「台湾語」としての文字が書けない。どうやって中国語を習得していたのか。楊逵も呉濁流も学校教育は日本語で受けているはずであり、中国語を身につける機会が乏しかったはずである。
王：たしかに時間がかかっていたはずである。楊逵の中国語は比較的流暢であった。戦後に北京語推進運動が起きていた背景がある。たしかに戦後 50 年代後半は空白時期になっている。この時期に楊逵は刑務所へ捕らえられており、刑務所で修得したのではないかと考えられる。

森：楊逵の書いた文章は台湾の教科書に載った。戦後のものか。
王：戦後の作品である。

張鴻鵬：「信」「達」「雅」の概念は、著者の原文、著者の思想を忠実に尊重することが原則だと考えられる。吉川英治について指摘があるが、吉川は「三国志」の内容を改作して翻訳している。楊逵の水滸伝もだいぶ改作して日本語にしている。たとえば劉備と張飛が出会う前のシーンで、豚肉を売っているシーンの表現が「犬肉を売っている」シーンに書き換えられている。手段として抗日意識を引用している、翻訳するときに自らの都合にあわせて翻訳している場合がある。ペン部隊は日本政府の指示で文化人が派遣されており、政府と関係ある文化人であると言えるが、楊逵の場合はどうか。翻訳が原文に忠実ではないし、著者の思想とは異なる表現である。また「信」「達」「雅」の原則にも反している。そうした翻訳方法が表現として適切であると言えるのかどうか。
王：学術的に、厳密に言えば良い翻訳とは言えない。吉川の作品は翻訳よりも「創作」に近く改作している。自らの都合に良い翻訳をするということは確かであるが、しかし楊逵の場合は吉川とは異なり、政府とは関係はない。まとめにの部分でも述べたが、翻訳そのものよりも、その関係より「外」に意

味があるのではないかと考える。

張：吉川英治と楊逵。吉川は政府と関係がある。政府の意志に従って翻訳する側面や、文学が原典とは異なって、政治に左右される影響とその意義をどう考えるのか。
王：吉川の三国志が政府の意志そのものを反映したとは思わない。自らの体験を通じて三国志という時代小説を創作した。政府のプレッシャーを受けたわけではない。たしかに当時ファシズムに影響されて政府に利用された側面はある。台湾でも作者が動員されたことがある。生産現場の見学などから、政府の「ファシズム」的影響を受けたかも知れない。

森：戦時下の文学者組織として「大日本文学報告会」が存在する。台湾人の作家も参加していたか。
王：台湾にも似たような別組織がある。その中で「皇民文学」が現れてきた。

森：楊逵の翻訳の中に出てくる台湾の警察を風刺するという部分は、対日協力者ということではなく、彼はもともとプロレタリア文学者である。その側面から評価すべきである。時代の流れに沿う側面はあるだろうが、彼の本質は階級的観念－ある意味では政治的だが、そうした点を作品にしているところに彼の本領が発揮されている。
王：指摘するとおりである。

馬場：吉川英治について。「ペン部隊」に行ったのはいつごろのことか。また吉川がもとにした三国志の原典（種本）は何か。またレジュメ４ページ、第三段落の箇所のところで、「『日本語社会』になりつつあった」との指摘があるが、当時、中国語を解釈できる層が存在していたのかどうか。世代間に違いがあったのかどうか。楊逵が日本語でしか表現できない状況があったのか。そうした中で検閲などを含めて抗日意識の揶揄を含めたのではないか。このことは日本語で発表せざるを得ない状況があったのではないか、という問題に関連する。
王：ペン部隊参加は 1938 年のこと。久保天随が翻訳した『三国志』をもとにしたが、これは翻訳に矛盾があったことを回顧しており、湖南文山の誤訳などに引きずられている。中国語の原典を直接読んで翻訳したのではなく、日本語訳をもとに作業した。楊逵については、1937 年ごろの台湾の新聞は中国語での発表は認められなくなる。しかし雑誌レベルでは中国語媒体のものが残存していたため可能であった。楊逵は中国語はある程度読めたはずだが、日本語で発表している。これは日本へ留学した際にプロレタリア文学と関係したことなどが関連していると考えられる。また 20～30 代の台湾知識人は中国語は読めて台湾語も話せたが、書き言葉は日本語が一般的であった。当時台湾で日本語発表の機会が多かった原因がここにある。

森：30 年前くらいの記憶になるが、『台湾民報』、『台湾新民法』などを見ると、同じ台湾でも、はじめは中国語で表現されているものが、後代になってくると日本語表現に切り替わってくる。これは日本語教育を受けた世代間での差異が認められる。楊逵は日本語でしかできなくなっていった世代ではないのか。ほかにも戴国煇は終戦時には中学生であり、日本語教育も受けていなかった。話し言葉は中国語で、書き言葉としての日本語教育を受けていない。これは植民地台湾においてどのように日本語が普及したのか、段階によって否定されているように思う。楊逵は戴国煇よりもひとつ前の世代で、中国語ができる状況が残っていた人物であろう。
王：当時、日本語教育は「寺子屋塾」のような書房で受けていたが、テキストは古典の三国志などを用いていた。戴国煇は日本に 30 年いたことも影響しているのではないか。

石井：翻訳を通じて「対外」的にも「対内」的にも意味を含んで理解していたという点で、おもしろいと感じた。質問は、先ほど戦後刑務所に入っていたと言っていたが、対日協力者としてか。その具体的理由は何か。
王：2.28 事件以後、国民党政府を「平和政府」と表現して反発したことが原因である。後、12 年刑務所に入れられた。
石井：対内的には抗日の揶揄ということだが、対外的には「大東亜」に対して何を伝えようとしたのか。それは具体的にどのようななところで、どのような表現であったのか。
王：当時の大東亜共栄圏の文化会では、「地方文化」や「大東亜文化を重視する」といったことや、中国での勢力拡大の影響などから、一時的に中国に対する興味が昂揚した背景がある。台湾人も中国の古典に親しんでいるが、それを民族に対する「利用」あるいは「架け橋」にした。大東亜文化の発揚するという名義に利用された。

石井：そうるすると楊逵は日本に反発しながらも大東亜の概念には共鳴していたのか、あるいは複雑な意識を持っていたのか。
王：それは複雑であったと思う。張氏のいうように政治的影響があったのかもしれない。

石井：一人の人物が複雑な立場からひとつの表現に盛り込んで表現したという視点がおもしろい。
私は中国大陸での農村調査を行っているが、三国志などのこうした古典は当然みな知っている存在である。それは紙芝居や演劇などに常に表現されており、村内でわかりやすいように「翻訳」されている。外国語の翻訳とは異なるが、その都度、意味を加えて、その時々の政府への批判を込めている。中国の人たちが何か批判する際に、モノを伝えるときの一定の意識を感じるし、言語に盛り込まれていたという感じる点でおもしろいと感じた。それが対「中日」という言語以外にも行われていたことが面白いと感じた。

森：水滸伝、三国志といった中国の代表的白話小説の原文は現代中国人でもすらすらと読み解けるものなのか。現在の中国人は原文を読んで理解できるのか。
王：読みにくい部分もある。台湾では簡易化した読み物や子供向けのものがある。また大人ならば読むことができるものである。

杉谷：黄得時と吉川の改作（創作）の点について。黄得時は吉川から四ヶ月ほど遅れで日中戦争期に水滸伝を翻訳している。一方、楊逵は大東亜戦争の終わり頃に三国志を単行本で台湾で出版している。日本の知識人を例にとると、大東亜戦争が始まる前と後で、日本に「協力」していく（せざるを得ない）側面が現れてくる。37 年から 41 年の時期、41 年から 45 年の時期を比較した場合、明らかに意識に差異がある。楊逵の翻訳については抗日意識があるのが良く理解したが、黄得時が水滸伝を翻訳しようとした際に、つまり日本語で中国の伝統的古典を翻訳しようとした場合に、どのような意味を込めて翻訳したのか。
王：黄得時は台湾の新聞で連載しているし単行本も出ているが、日本では見あたらず詳細が分からない。台湾で新聞から拾い上げて分析するしかない状況である。

報告２：石井弓（東京大学）
石井弓「「順口溜」から読み解く日中戦争の集合的記憶」

【報告要旨】

【質疑応答】（司会：馬場）
馬場：本報告は本年度現代中国学会の全国大会で発表された内容である。大変おもしろく感じたので本会で報告をお願いした次第である。日中戦争の記述について党や国家の記述する文史資料などの記録とは異なるかたちでの「村の語り」について、どのように当時変容したのかということ含めて語られた。日本軍に協力した警備隊や、共産党の軍事動員とそれへの反発など、村落レベルでの現場での「語り」が共産党の指導する政治的言語空間と異なって現れている点が、大変面白く感じた。

王暁葵：中国における戦争記念碑や記念行事について、どのように作られたのか調査をしたことがある。いわば「記憶の場」についての調査である。記憶そのものの調査について調査しており非常に面白く感じた。手法についてだが、人類学民俗学の調査に近いと感じる。質問は大きく分類すれば「民謡」と「民歌」に分けられるが、当然地域によって異なる。「順口溜」は分類するとどうなるのか。もうひとつの質問は「伝承」について。村社会で行われた「時間」や「場」といった存在、記念日などの生活の一部として日常の場で語られる側面がある。報告内容から外部の人間に対して他者の視線を意識しながら話していると感じたが、自分の村に対して、村の若者に対しては別の表現で語られているのではないか、この点はどうか。

石井：専門ではないが、一定のリズムをもつ歌になるものが「民謡」、在野で語られているようなより簡素なものが「民歌」であるとイメージしているが、両者の境界は曖昧である。「順口溜」は「民

歌」に入ると思う。次第に節が出来てきて「民謡」として謡われることもある。
伝承の場はたくさん存在する。歌われるきっかけとして、文革中の頃や同時期の集団農業（人民公社）は、農村で別々に農作業が行われていた場から、一緒に行動する場が増えたことが影響している。村の日常という点については、やはり集団農業を行う際に、仕事の合間や休憩時間などに、歌の上手なおじいさんを中心に子供が集まってくる際（孫が預けられる際に孫にたいして歌う）に歌を聴く、というような状況がある。

王：日本イメージがどのように生産され、消費されたのかという問題について、もうひとつ質問したい。現在でも同様、イメージに善し悪しが影響する。伝承により日本イメージが語られる状況から、新しい記憶と再生産されたと考えられるが、調査を行ったことから伝承のなかでの日本のイメージはどのように語られているか。
Ａ：歌の中では日本人としてのイメージは非常にあいまいであり、確固としたものがない。むしろ村の中での人間関係がはっきりと語られている。たとえば「日本軍に追いかけられて逃げる」という「共通の夢」をみている。そこでは日本軍の「顔」というものがほとんど出てこない。なんらかの視角イメージを与えられることは村の中ではほとんどないはずであるが、映画によって視覚的イメージが与えられたと考えられる。

森：1984 年に北京の友誼賓館で、張芸謀の『黄色い大地』を見た。八路軍の文芸工作社が黄土高原の農村に民歌を収集する目的で入り込んだという筋書きである。その中で立ち後れた黄土高原の様相を映像としては美しく描き出している。抗日戦争期の黄土高原の農村について表現しながら、反日的要素というものはほとんどない。こうした題材から見ると、当時の中国人が「順口溜」の研究をしているイメージを持っているが、この点はどうか。

石井：中国全土では不明だが、山西では民謡を集めた資料があり、「順口溜」のようなものが多く出てくる。共産党を賞賛した内容である。実際に村の中で歌われているものは異なり、日常のものが多く、共産党の政策に適した集められたものはあるが、「日常」に沿ったものというものが少ない。

杉谷：文革中に紅衛兵が農村へたどり着いた際、帰省後、知識青年文学運動が起きた際に、行ったさきの農村の歌を持ち帰って書くということが流行し、「共産党的ではない」農村の歌というものが文学作品に出てくる。「黄色い大地」も民謡ブームが起きてゆく時期も同時期であり、そうした背景があるのではないか。質問は、趙家村に関する歌で、「戦争を過ぎた頃は歌いたくなかった」という指摘があったが、たとえば李新年のとった行動が村の中で、常識であったために語らなかったのか、それとも都合の悪いことは忘れたいとする判断であるのか、文革中に無理矢理語らされる中で、戦争の記憶を忘れていたところを次第に思い出す必要が出てきたのか、どのように判断すればよいのか。
Ａ：聞き取りの中では「辛くて語れなかった」と言われる。推察すると、戦争のことは常識として知っていたという側面も、精神的に辛かったという側面の２つある。

杉谷：土地改革との関係で語られる側面について。はじめは戦争の歌として語られていなかったという側面があるといった可能性があるのではないか。
石井：当初は劉三和（作者）が自分の境遇を憂いて謡ったものだと考えられる。これが次第に自分たちの歌に謡い変えて謡ってきたと考えられる。

杉谷：歌い始めるのは文革期の政治運動を行っていた頃か。
石井：いつかは分からない。趙家村のなかでは特にその部分が謡われたということである。知っていたが謡わなかったという側面もあるかもしれない。

馬場：李新年について。戦後、漢奸裁判と思われるもので死刑になっている。これはいつごろか。死刑にしたということが「犠牲者」として表現されていることと関連するのではないか。また、この村の宗族の状態についてはどういう関係か。
石井：民間裁判については不明。李新年は捕えられて、各村を回って石を投げられた上で最終的に死刑になった、という点までは判明している。それを「民間裁判」と表現した。それが「犠牲者」かどうかという点であるが、捉えられて殺されたということは皆知っている存在である。「犠牲者」という意味内容を含んでいるものと判断している。重要な点は、「自分たちが犠牲者を生み出してしまった」と言う側面に置かれている。宗族については、李姓が多く、「大家族」的な団結力が非常に強い。

村の中から犠牲者を出した、あるいは裏切り者を出したということは村の中で非常にショックが大きい出来事であったと考えている。

森：劉三和について。文字が読み書きできたのか。
石井：できた。

森：最初から「順口溜」としてを作ったものなのか、自己批判を含めて作ったものなのか。
Ａ：考えねばならない点である。この歌を完全に覚えているひとが少ない。謡う前に禁止条項のようなものをつけて謡うひとが多い。謡う中で後からつけた可能性がある。

森：後に共産党の指導があって現在の形式になったとは考えられないか。
石井：判断が難しいところである。村人が口をそろえるのは劉三和であると言う。これは劉三和が住む行政村の、相続と土地改革の財産の問題のなかでの「お家騒動」と関連する。土地改革の内容がメインになっていて、その一部が利用されたと考えるのが自然ではないかと考えている。